Repression-Sensitization 次元における防衛反応の差異

——言語連想を中心に¹——

京 都 大 学

相 馬 壽 明²

DIFFERENCES IN DEFENSE RESPONSES IN REPRESSION- SENSITIZATION DIMENSION: ESPECIALLY IN WORD-ASSOCIATION

TOSHIAKI SOMA

Department of Educational Psychology, Kyoto University

The present study was designed to demonstrate the validity of repression-sensitization (R-S) dimensions as a defense dimension, and to clarify the characteristics of the defense by examining the differences of the defense responses as to verbalize feelings of anxiety. Rapaport's Word-Association Test (WAT) and MMPI including Byrne's R-S Scale and Taylor's MAS were given to 31 subjects. MAS scores, association reaction time (RT) and GSR to WAT were examined for 14 repressors and twelve sensitizers. The results were that repressors showed lower anxiety scores, longer RT and larger amounts of GSRs to WAT than did sensitizers. It was suggested that repressors defended by avoidance and sensitizers by approach, and that repressors intended to avoid verbalizing feelings of anxiety and sensitizers tried to verbalize feelings of anxiety.

防衛機制 (defense mechanism) は無意識的に動機づけられた不安を低減する活動として、主に精神分析学において研究されてきたが、これを実験的に検証しようとした試みも多く、なかでも知覚的防衛 (perceptual defense) の研究は防衛機制を実験的に検証するものとして注目された。この知覚的防衛の研究 (Bruner & Postman, 1947) から、さまざまな防衛機制を包括する1次元の分類化がおこなわれ、防衛次元の1つとして概念化されたのが repression-sensitization 次元 (以下 R-S 次元と略す) である。

R-S 次元という連続体の repression の極では抑圧 (repression)、否認 (denial) などの防衛機制が含まれ、この極に位置するものは repressor と呼ばれ、不安覚醒刺激に対する防衛反応として回避反応を示すとされている。また sensitization の極では知性化 (intellectualization) などの防衛機制が含まれ、この極に位置するものは sensitizer と呼ばれ、防衛反応として接近反応

を示すとされている。

Byrne (1961) が Repression-Sensitization Scale (以下 R-S 尺度と略す) を作成して以来、R-S 尺度をもちいた多くの研究は上述の定式化を立証し、R-S 次元が防衛次元として有効かつ妥当性のあることを示してきている。しかし防衛反応における不安の言語化の問題に関しては、いまだ十分な確証がえられておらず、Byrne (1964) はこの問題の解明が R-S 次元の精密化にとって重要な課題であることを示唆している。

防衛反応における不安の言語化の問題に関して、repressor と sensitizer の示す差異についてはいくつかの報告がある (Lazarus & Alfert, 1964; Byrne & Sheffield, 1965; Lomont, 1965; Hare, 1966; Parsons, Fulgenzi, & Edelberg, 1969)。これらの報告は一樣に、repressor は自己評定や言語報告ではあまり不安を示さないが、言語連想における混乱 (verbal disturbance) や自律性の混乱 (autonomic disturbance) を示しやすく、sensitizer はその逆の傾向を示している。つまり repressor は不安を言語化しないが、それは必ずしも repressor の内部状況を反映しているとはいえず、むしろ不安の言語化を避けている (回避反応) と考えられ、逆に sensitizer は不安を言語化すること

¹ 本論文は 1976 年京都大学大学院教育学研究科に提出した修士論文の一部を加筆修正したものである。

² 本論文をまとめるに際して御指導下さいました京都大学教育学部梅本堯夫教授、河合隼雄教授に厚く感謝します。

TABLE 1
Word-association test list

1 世界	†21 自殺	41 タクシー
†2 愛	22 山	†42 母
†3 父	†23 家	43 テーブル
4 帽子	24 紙	44 肉
†5 胸	†25 同性愛	45 乳首
6 カーテン	26 暖房器	46 レース
7 かばん	†27 ガールフレンド	47 水
8 飲む	28 スクリーン	†48 吸う
†9 パーティー	†29 手淫	49 馬
†10 下痢	30 梓	50 火
11 本	31 男	†51 陸
12 あかり	†32 性的興奮	52 農家
13 じゅうたん	33 映画	53 社会
14 椅子	34 切る	†54 息子
†15 ボーイフレンド	35 笑う	55 税金
†16 ペニス	†36 咬む	56 タバコ
17 暗い	†37 女	57 都会
18 憂うつ	38 ダンス	†58 性交
19 春	39 犬	59 病院
20 どんぶり	40 娘	60 医者

† Traumatic word.

によって不安を低減しようとしている（接近反応）と考えられている。

このように不安の言語化の問題は、無意識的に動機づけられた不安を低減する活動としての防衛機制的考えからも、repressor と sensitizer の防衛反応の差異を検討するうえで重要な課題であると思われる。そこで本研究では、防衛反応が生じやすいと考えられる言語連想検査をもちいて、R-S 次元における防衛反応の差異について検討するとともに、不安の言語化にみられる repressor と sensitizer の差異から、両者の防衛反応の特徴を明らかにすることを目的とする。

方 法

被験者 大学生および大学院生で、男性 17 名、女性 14 名、合計 31 名である。年齢は 20 歳から 30 歳までで、平均年齢は 24.8 歳である。

テスト材料 1. 言語連想検査：Rapaport (1946) の言語連想検査表の訳語 (Table 1) がもちいられた。そして外傷語 (traumatic words) の 20 語を不安覚醒刺激として、非外傷語 (non-traumatic words) の 40 語を中性刺激としてもちいた。刺激語は白色ケント紙にフリーハンドで書かれたものである。刺激カードの大きさは $13 \times 18 \text{ cm}^2$ で、文字の大きさは $5 \times 10 \text{ cm}^2$ である。

2. MMPI：言語連想検査施行後、各被験者に日本版 MMPI (三京房版) が施行された。R-S 次元測定のため、Byrne (1961) の R-S 尺度の採点に従って、156 項目について採点された。repression の指標として L, K, Hy denial が、sensitization の指標として D, Pt, Welsh Anxiety がそれぞれ含まれ、高得点は sensitization を、低得点は repression を示す。さらに言語化された不安を測定するために、Taylor (1953) の MAS (Manifest Anxiety Scale) に従って 50 項目が採点された。

装置 連想反応時間 (association reaction time：以下 RT と略す) 測定のためにマイクロフォン、ボイスキー (TKK 製)、デジタルカウンター (TKK 製) がもちいられ、GSR (galvanic skin reflex：電位法による SPR) 測定のために二素子脳波計 (三栄測器製) がもちいられた。

手続 被験者は実験者によって脳波室に誘導され、安楽椅子に座す。GSR 測定のため、探查電極として左手手掌に、基準電極として前腕部にそれぞれ皿状銀電極が装着された後、“これからあなたに言葉の書いたカードをお見せします。その言葉からあなたの心に一番早く浮かんだ言葉をひとつだけ、できるだけ早く教えてください。”という教示が連想検査のために与えられた。3 語の練習語 (星、花、空) による準備をへて本実験にはいる。

被験者は閉眼状態で、ブザーの音を合図に開眼し、刺激カードの言葉を見て連想する。刺激は被験者の正面前方約 1m、被験者の目の高さとはほぼ同じ位置に提示される。提示はマニュアルで、ブックスタンドに立てられたカードが順次くられてゆく。提示順序は一定で、提示間隔は被験者の RT に従い、反応してから 10 秒後に次の刺激が提示される。

反応の記録方法 RT はブザーの鳴りはじめから被験者が反応するまでの時間とし、カウンターでよみとって 0.01 秒単位で記録された。GSR は時定数 1.5 秒、紙記録スピード 1 秒 0.3 cm で記録された。なお実験室は約 18°C で、準防音状況であった。

結果の処理 RT は原測値が秒単位で log 変換された。GSR は mV に換算されたが、測定誤差が考えられたので、0.5 mV 未満のものは無反応とした。Burstein, Fenz, Bergeron, & Epstein (1965) に従って、第 1 陰性波、陽性波、第 2 陰性波の振幅の合計を反応量とした。

結 果

R-S 尺度の結果 男女 31 名の R-S 得点の平均と得点範囲が Table 2 に示されている。女性の方がやや高い得点を示しているが、統計的に有意な差ではなく、性差はみられない。高い得点が sensitization の測度であるから上位 12 名 (男女それぞれ 6 名) が sensitizer

TABLE 2
R-S scores

Group	N	Range	M (SD)
Males	17	45—106	68.76 (18.45)
Females	14	33—103	69.57 (23.22)

TABLE 3
R-S scores of repressor and sensitizer

Group	N	Range	M (SD)
Repressors	14	33—62	49.86 (8.36)
Sensitizers	12	81—106	92.08 (6.70)

TABLE 4
MAS scores

Group	N	Range	M (SD)	t
Repressors	14	2—15	9.36(3.66)	
Sensitizers	12	21—39	29.00(5.26)	10.56***

*** $p < .001$

として、下位 14 名 (男女それぞれ 7 名) が repressor として選択され、分析の対象とされた。repressor 群と sensitizer 群の R-S 得点の平均と得点範囲が Table 3 に示されている。

MAS の結果 repressor 群と sensitizer 群の MAS 得点の結果が Table 4 に示されている。sensitizer 群の方が有意に高い不安得点を示しており、sensitizer の方が言語化された不安が高いことが示された。

RT の結果 外傷語および非外傷語に対する 両群の RT の結果が Table 5 に示されている。分散分析の結果、条件間 ($F=62.15$, $df=1/116$, $p<.01$) でも、群間 ($F=206.90$, $df=1/116$, $p<.01$) でも有意な差がみられた。これは両群ともに非外傷語よりも外傷語で有意に RT が遅れたことを意味しており、しかも repressor 群は刺激条件に関係なく sensitizer 群よりも有意に RT が遅れたことを意味している。

GSR の結果 外傷語および非外傷語に対する 両群の GSR 反応量が Table 6 に示されている。分散分析の結果、条件間 ($F=56.01$, $df=1/116$, $p<.01$) でも、群間 ($F=11.02$, $df=1/116$, $p<.01$) でも有意な差がみられた。RT と同様 GSR においても、両群ともに非外傷語より外傷語で有意に大きな反応量を示している。さらに repressor 群は sensitizer 群に比べて、刺激条件に関係なく有意に大きな反応量を示したといえる。

さらにいずれの被験者にも GSR の慣れ (habituation) の現象が認められたので、両群の慣れのパターンを吟味するために、刺激語を提示順序に従って 5 つのブロック

TABLE 5
Association reaction time (log sec)

Group	N	Traumatic words	Non-traumatic words
		M (SD)	M (SD)
Repressors	14	0.61 (0.05)	0.56 (0.06)
Sensitizers	12	0.52 (0.08)	0.45 (0.07)

TABLE 6
Amount of GSR reaction (mV)

Group	N	Traumatic words	Non-traumatic words
		M (SD)	M (SD)
Repressors	14	3.55 (1.43)	2.31 (0.96)
Sensitizers	12	2.78 (0.90)	1.89 (0.57)

(各ブロックには外傷語が 4 語、非外傷語が 8 語含まれる) にわけ、各ブロックにおける外傷語と非外傷語に対する 両群の GSR 反応量を図示したのが Fig.1 である。統計的に有意ではないが、repressor 群の方が慣れが良く、sensitizer 群は慣れが不良であるという 両群の慣れのパターンの差異が認められた。しかも 両群の慣れのパターンは、外傷語でも非外傷語でも類似していることが示された。

考 察

R-S 次元における防衛反応の差異、特に不安の言語化における差異を MAS, RT, GSR の結果から検討する。

FIG. 1. GSR habituation process.

Notes. RT represents GSRs to traumatic words in repressors.

ST represents GSRs to traumatic words in sensitizers.

RNT represents GSRs to non-traumatic words in repressors.

SNT represents GSRs to non-traumatic words in sensitizers.

ここでは MAS が言語的指標であるのに対して、GSR は非言語的指標であり、RT はその中間的指標として位置づけられている。

MAS は個人が抱く不安すなわち身体的、精神的な不安で明らかに意識されるものを測定するものである。MAS の結果は sensitizer の方が repressor よりも不安が高いことを示しており、これは Byrne (1964) らの結果に一致している。しかしながら RT や GSR の結果からも明らかのように、これは結果の一面でしかなく、repressor は不安が低いという字義通りの解釈には問題がある。むしろ MAS を意識された不安の言語報告とみるならば、repressor は不安の言語化を避ける（回避反応）のに対して、sensitizer は不安を言語化する（接近反応）と考えることができる。従って MAS 得点の結果は、不安の言語化という防衛反応からみるならば、R-S 次元における防衛反応の差異のあらわれと考えられる。

言語連想検査における RT に関して Jung (1969) は、RT の遅れが情緒的な混乱 (emotional disturbance) の指標になることを示している。RT の結果は、不安覚醒刺激である外傷語に対して、repressor が sensitizer よりも有意に RT の遅れを示しており、repressor の方が大きな情緒的な混乱を示している。これは外傷語によって喚起された不安に対して、repressor は不安の言語化を避ける（回避反応）ことによって不安を低減しようとする防衛反応を示すために、不安を言語化する（接近反応）ことによって不安を低減しようとする sensitizer よりも RT が遅れたと考えられる。この結果は RT を指標としていないが、言語連想をもちいた Lomont (1965)、Haney (1973, 1974) らの研究結果と一致するものであり、不安の言語化における防衛反応の差異が RT の差異として示されたといえる。

言語連想検査における GSR の意味について Smith (1922) は、情緒的な変化をおこさせる言語ほど大きな GSR を生起させるとしている。外傷語に対して repressor の方が sensitizer よりも有意に自律性の混乱を示すという GSR の結果は、これまでの Hare (1966)、Parsons et al. (1969)、Scarpetti (1973) らの結果に一致するものである。repressor は不安の言語化を避ける（回避反応）ために、不安によってもたらされた情動緊張が解消されず、大きな GSR 反応量を示したのに対して、sensitizer は不安を言語化する（接近反応）ために、不安によってもたらされた情動緊張が解消され、より小さな GSR 反応量を示したと考えられる。従って言語化による情動緊張の解消という観点から、GSR における差異は防衛反応の差異を示すものと考えられる。

GSR の慣れの結果は、repressor の慣れが良いのに対して sensitizer の慣れが不良であるという、慣れのパ

ターンの差異を示している。これまでも GSR の慣れにおける個人差についての研究はあるが、R-S 次元に関連したものはみられない。言語連想検査における GSR は、GSR のもつ定位性反射の面をよく反映していると考えられるので、定位性反射と防衛反応の関連から結果を考察したい。新美・白藤 (1969) は、慣れの良さは定位性反射がすみやかに消褪するので新しい環境への情動面の適応がはやいか、外部に対する関心の減退を示唆しており、慣れの不良さは定位性反射の持続を意味し、それは新しい環境におかれたときに、その環境刺激によっていつまでも情動緊張ないし興奮が持続しやすく、その環境に慣れにくいことを示唆するとしている。repressor は不安の言語化を避けるために情動緊張が解消されず、ブロック 1・2 に示されるように sensitizer よりも大きな反応量を示すが、防衛に成功すると、外傷語を回避するために不安が喚起されにくくなり、ブロック 3・4 に示されるように sensitizer よりも反応量が小さくなり、慣れの良さを示したと考えられる。他方 sensitizer は不安を言語化することによって情動緊張を解消するために、ブロック 1・2 では repressor よりも著しく反応量が小さいが、外傷語に接近するためたえず不安を喚起されやすく、ブロック 3・4 ではむしろ repressor よりも大きな反応量を示すことになり、慣れの不良さを示したと考えられる。このように慣れのパターンの差異は、repressor の方が環境に慣れやすい、適応がよいという結果を示しているが、これは repressor の方が一般に適応がよいというこれまでの研究結果 (Byrne, 1964) に一致するものである。

以上の結果は、repressor と sensitizer が不安覚醒刺激に対して異なった防衛反応、すなわち前者は回避反応、後者は接近反応を示すというこれまでの定式化を確証したものであり、R-S 次元が防衛次元として有効かつ妥当性のあることを示したといえる。さらに不安の言語化における差異については、repressor が不安の言語化を避けるのに対して、sensitizer は不安を言語化するという、不安に対する防衛反応の特徴を明らかにしたといえる。

ところで、これまでの考察は主に外傷語に関してなされたものであって、非外傷語における両群の差異については触れられなかった。従って RT と GSR の結果にみられる非外傷語での差異について検討する必要がある。防衛反応が外傷語において生起しやすいことは、その刺激語の性質からも考えられることであるが、非外傷語での差異はどのように説明されうであろうか。

まず防衛反応の観点から考えられることは、言語連想検査そのものが与える影響である。言語連想検査は個人のコンプレックスを検索する有効な方法であるが、それゆえに被験者にとっては、検査状況そのものが不安覚醒

状況としての意味をもつということである。しかも R-S 次元の両極にある repressor と sensitizer は、このような状況に対する感受性がともに鋭敏であると考えられる。また不安を喚起する刺激語は個人によって異なっており、必ずしも非外傷語が中性的な意味あいをもつとはいえない。従って検査状況のもたらす影響が、非外傷語においても防衛反応を生起させたと考えることができる。

次に RT と GSR にみられた R-S 次元の差異は、刺激語のもつ意味内容に関係なく、言語刺激そのものに対する個人差のあらわれと考えることもできる。つまり R-S 次元が単なる防衛次元ではなく、より包括的な人格次元に関係している可能性が考えられる。このことに関して Eysenck (1967) は、R-S 次元が外向性-内向性 (extraversion-introversion) 次元 (以下 E-I 次元と略す) というより高次の概念を生み出すような多くの特性の 1 つであるという示唆を与えている。確かに RT の結果を E-I 次元からみるならば、感覚閾値の高いとされる外向者は、低いとされる内向者よりも刺激語に対する RT が遅れると考えることができる。また GSR の結果は、GSR 反応量と外向性との間に負の相関があるという知見には一致しないが、GSR の慣れにみられる repressor の結果は GSR の順応性と外向性との間の高い相関に、一致するものである。従って repressor と外向者、sensitizer と内向者という関係から、R-S 次元と E-I 次元の関連が予測される。さらに Eysenck の E-I 次元を基礎づけている生理学的な観点からみるならば、皮質・皮質下の拮抗関係から結果を説明することも可能である。repressor を皮質抑制型とするならば、皮質の抑制によって RT は遅れるが、皮質下の興奮によって GSR が大きくなると考えられる。また sensitizer を皮質興奮型とするならば、皮質の興奮によって RT が早くなり、皮質下の抑制によって GSR が小さくなると考えられる。もちろんこのような説明は仮説の域を出ないが、Parsons et al. (1969) にも指摘するように、R-S 次元は必ずしも単次元を示しているとはいえない。従って今後他の次元との関連が明らかにされていくことが、R-S 次元の精密化のために必要とされる課題であるといえよう。

要 約

本研究は R-S 次元における防衛反応の差異を検証することによって、R-S 次元の防衛次元としての有効性を示すとともに、不安の言語化における差異から、repressor と sensitizer の防衛反応の特徴を明らかにすることを目的とした。

31 名の男女学生に Rapaport の言語連想検査と MMPI が施行され、14 名の repressor (男女それぞれ 7 名) と

12 名の sensitizer (男女それぞれ 6 名) の結果が、MAS, RT, GSR を指標として検討された。

主な結果は次の通りである。

1. MAS 得点は sensitizer の方が repressor よりも高かった。
2. RT は repressor の方が sensitizer よりも遅れた。
3. GSR は repressor の方が sensitizer よりも大きな反応量を示した。さらに repressor は慣れの良さを示すが、sensitizer は慣れが不良であるという傾向を示した。

以上の結果から、不安覚醒刺激である外傷語での差異は、repressor が回避反応、sensitizer が接近反応という防衛反応を示したことによると考えられた。さらに不安の言語化における差異については、repressor は不安の言語化を避けるが、sensitizer は不安を言語化するという防衛反応の特徴が明らかにされた。

また中性刺激である非外傷語での差異は、R-S 次元がより包括的な人格次元に関連している可能性から、Eysenck の E-I 次元との関連を示唆した。

引 用 文 献

- Bruner, J. S., & Postman, L. 1947 Emotional selectivity in perception and reaction. *Journal of Personality*, 16, 69-77.
- Burstein, K. R., Fenz, W. D., Bergeron, J., & Epstein, S. 1965 A comparison of skin potential and skin resistance responses as measures of emotional responsivity. *Psychophysiology*, 2, 14-24.
- Byrne, D. 1961 The repression-sensitization scale: Rationale, reliability, and validity. *Journal of Personality*, 29, 334-349.
- Byrne, D. 1964 Repression-sensitization as a dimension of personality. In B. A. Maher (Ed.), *Progress in experimental personality research*. New York: Academic Press. Pp. 169-220.
- Byrne, D., & Sheffield, J. 1965 Response to sexually arousing stimuli as a function of repressing and sensitizing defenses. *Journal of Abnormal Psychology*, 70, 114-118.
- Eysenck, H. J. 1967 *The biological basis of personality*. Springfield, IL: C. C. Thomas.
- Haney, J. N. 1973 Approach-avoidance reactions by repressors and sensitizers to ambiguity in a structured free-association task. *Psychological Reports*, 33, 97-98.
- Haney, J. N. 1974 Continuous associative responding to threatening and non-threatening stimuli by repressors and sensitizers. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 152.
- Hare, R. D. 1966 Denial of threat and emotional

- response to impending painful stimulation. *Journal of Consulting Psychology*, **30**, 359-361.
- Jung, C. G. 1969 *Studies in word-association*. London: Routledge & Kegan Paul.
- Lazarus, R. S., & Alfert, E. 1964 Short-circuiting of threat by experimentally altering cognitive appraisal. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **69**, 195-205.
- Lomont, J. F. 1965 The repression-sensitization dimension in relation to anxiety responses. *Journal of Consulting Psychology*, **29**, 84-86.
- 新美良純・白藤美隆 1969 皮膚電気反射 医歯薬出版
- Parsons, O. A., Fulgenzi, L. B., & Edelberg, R. 1969 Aggressiveness and psychophysiological responsiveness in groups of repressors and sensitizers. *Journal of Personality and Social Psychology*, **12**, 235-244.
- Rapaport, D., Schafer, R., & Gill, M. 1946 *Diagnostic psychological testing*. Vol. 2. Chicago: Yearbook Publishers. Pp. 3-84.
- Scarpetti, W. L. 1973 The repression-sensitization dimension in relation to impending painful stimulation. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **40**, 377-382.
- Smith, W. W. 1922 *The measurement of emotion*. New York: Harcourt, Brace.
- Taylor, J. A. 1953 A personality scale of manifest anxiety. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **48**, 285-290.

—1977. 7. 25. 受稿—

SUMMARY

The purpose of the present study is to demonstrate the validity of repression-sensitization (R-S) dimension as a defense dimension by examining the differences of the defense responses, and to clarify the characteristics of the defense by examining the differences in verbalizing feelings of anxiety.

Rapaport's Word-Association Test (WAT) and MMPI were given to 31 university students. WAT consists of 20 traumatic words and 40 non-traumatic words. MMPI includes Byrne's R-S Scale and Taylor's MAS. The results of 14 repressors (seven males and seven females) and twelve sensitizers (six males and six females) divided by R-S Scale were analyzed concerning MAS scores and association reaction time (RT) and GSR to WAT.

The main results were as follows:

(1) On MAS, repressors showed lower scores than did sensitizers.

(2) On RT, repressors showed longer RT to both traumatic and non-traumatic words than did sensitizers.

(3) On GSR, repressors showed larger amounts of GSRs to both traumatic and non-traumatic words than did sensitizers. On the GSR habituation process, repressors presented better habituation than did sensitizers.

From the above results, it was concluded that repressors defended by avoidance and sensitizers did by approach to traumatic words as anxiety evoking stimuli, and that repressors tended to avoid verbalizing feelings of anxiety and sensitizers tried to verbalize feelings of anxiety. Concerning the differences in non-traumatic words as neutral stimuli, it was suggested that R-S dimension would probably be related to more comprehensive personality dimensions, especially to Eysenck's extraversion-introversion dimension.